

京都へ帰つた親鸞さま

二十年に及ぶ関東伝道を終えて親鸞さまが故郷京都へ帰ってきたのは齡六十歳になつた貞永元年(1239)の頃であった。帰郷の動機は他にもあつたろうが、親鸞様は生涯の師匠法然さまを追慕し続けた。法然様の説いた専修念佛の真意を顕証する目的で書きあげた『顕淨土真実教行証文類』六巻を元成するためには、(法然さまは二〇年前(延喜年三三)に亡くなつてゐるが)その遺光に接したい。そしてその同門の人たちにも逢つし法然の遺訓を聞きたいという思いがあつたに違ひない。

無明長夜の燈炬なり 智眼くらしと悲しむな
生死大海の船筏なり 罪障おもしと歎かざれ
す

「念佛停止(モニカジ)」の彈圧もさることなが
ら帰京後の親鸞さまに最も苛酷な衝撃を与えたのは、かつて自らが教化した関東教団のみ
じめな党派対立であつた。しかも親鸞さまの
長子「善鸞」が大きく関わつてゐる事実が突き
付けられたことであつた。関東からの通報や
訴えは日々親鸞さまの心肝を揺るがしたに過ぎ
ない。しかし親鸞さまはこの異変を人ひと
として身をかわすことはしなかつた。

念佛教化をおこなつたおのれ自身を問ひ詰
めた。異端意義沈諍の目的で関東へ派遣しな
いたのか。「わが子」善鸞への「愛と慈悲」はどうだつ
たのか。「ここへ来て親鸞さまは、自身の
「信心」を、「ムカシ」「去来」など、今ま

善鸞の離反のなかでの「親の胸中」を『歎異鈔』には淡々とこう敍べてある

一九日	(土)	順光寺	西方寺	報恩講	三回忌
一五日	(火)	福成寺	報恩講		

A detailed botanical line drawing of a heart-shaped seed pod, likely from a species in the Malpighiaceae family. The pod is pointed at the base and has a prominent midrib. At the apex, there is a small, five-petaled flower cluster. A scale bar is located at the bottom left.

【愚禿釣】上
賢者の信を聞きて 愚禿が心を顯わす
賢者の信は 内は賢にして外は愚なり
愚禿が心は 内は愚にして外は賢なり

法然さまは、外面愚者のように振る舞わわ
ていたが、内実は知徳充実のお方であつた。
それに対し、の親鸞は、賢者ぶり教師ぶる
が、内実は虚偽不実。偽善欺瞞の悲しい老い
ぼれ。

とはいえ善鸞は、己の伝道の便宜のため「面授口伝」（夜ひそかに親鸞から直接つたえられた教え）と称して（秘事法門的な）言辭を弄したことも事実あつたであろうし、また、当時世俗の風潮に迎合し「巫呪祈祷」のようなことも行い、逆に正当派とされた性真たちを「異端異義」として幕府に誣告したこととも事実である。だから「義絶」（親子の縁を切る）があつたことも事実。親鸞がそのことで深刻なダメージを受けたことも容易に推

二二日（火） 勝林寺 報恩講
二三日（水） 出石組 連研役員会
三四日（木） 横山一夫宅 一周忌
三四日（木） 佐田・奥栗尾 報恩講

[View all posts](#) [View all posts](#) [View all posts](#)

有情の邪見熾盛にて 蒜林棘刺のごとくなり
念佛の信者を疑謗して 破壊眞毒さかりなり
愛憎違順することは 高峰岳山にことならず

それにつけても、親鸞さまは、ますます先輩の聖観や隆寛の遺稿『唯信鈔』や『一念多念分別事』などを書写し、またその注釈を試みてますます法然さまの「一心専念称名正定業」のことを念報するばかりであった。

親鸞さまの晩年は、上述のように、天変地変
念仏弾圧、末法獨世、そのうえ弟子たちの内
乱、わが実子善鸞の離反。家庭的な貧困渦巻
くなかにあって、それに耐え、それに真正面
から向き合って、「愚禿」の悲嘆のなかか
むしろ如来本願の恩徳を報謝して生き抜かれ
た九十年であった。

淨土真宗に帰すれども 真実の心はありが
たし

虚偽不実のわが身にて 清淨の心はさらこ
なし

「愚禿悲歎述懐和讃」

しかし、後の記録によれば、善鸞の実子「如信」は北関東で父子共に暮らしているし、孫野「覚如」も何度も善鸞と逢っている。また親鸞の最晩年には、父のもとへ帰った親鸞と善鸞とが火鉢を囲み額をつきあわして密談をしていた場面も伝えられている。

何を話していたのか。叱責や教諭ではなかったと思う。絶とうとして絶ちきれない親子の悲しい命運のなかで、こうした親子のもつれも親鸞は「我が身に引き受けて」嘆き、そして如来のお慈悲と共に歎戴していたのである。

二五日	(金)	正法寺	報恩講	午後
二六日	(土)	正法寺	總仏講	
二七日	(日)	みのりを聞く会	七時半上	
二七日	(日)	出石組	連研	(西宗寺)
三〇日	(水)	奥小谷	報恩講	
		（敬称）		

($\frac{E}{H}$)

善變の離反のなかでの「親の胸中」を『歎異鈔』には淡々とこう敍べてある

十一月 勝林寺 予定

— 1 —

三日(木)光蹊寺報恩講

[View all posts by admin](#) | [View all posts in category](#)

谷報恩講

(敬称略)

坊守として



寺の住職の妻を、浄土真宗本願寺派では多く「坊守さん」と呼ばれてきた。（宗教法人は「寺庭婦人」、ふるくは「お庭さん」。）「大黒さん」と呼ぶところもあるらしい。「坊守り」とは、住職を扶けて寺および寺院活動に従事する人のことである。そういう意味からいって「瞭子坊守」は字義通りことば通りの人であった。しかし、かと云つて決して「でしゃぱり」ではなくむしろ「控え目」結婚してこの寺に入ったのは昭和二十七年春。その披露宴のとき、先輩ご住職山崎一朗先生が「牡丹の花が咲き出たよう」と云われたのは、あながち着いたその時の衣装のせいばかりではないと後日先生の談。とにかく先輩・先達やご門徒のひとびとから可愛がられ最貞にされた。

まず、家庭のなかの父母から可愛いがれた。

「一変怒らせてみよう」と度々試みるけれども怒った顔を見たことがない」と母。父は特に京都ご本山に行くとき（勝林寺は年に一度の「念佛奉仕団」を組織したのは全国第一番目？）には必ず新坊守を同伴した。以下何事につけても前々住職はこの瞭子新坊守を随伴させて育てた。

結婚から昭和三十五年ころまでは社会全体まだ戦後の貧困経済であった。新坊守は結婚直前まで東京の千代田女專に通い、都内の有名デパートの洋裁部でアルバイトもしていた。当時「アメ中」と云つていたアメリカ占領軍放出の中古の古着を、結婚祝いにハワイ在住の叔父から送られたシンガーミシンを駆使して、子供服は勿論、父の法衣・布袍。和服・洋服なんでも仕立て改装した。近所のおばさんたちのものまで引き受けた。仕立て直つたものを見ておばさんたちは「魔法使いのよう」と驚いた。料理も抜群だった。急なお客のときも、そこにある材料で調理してもてなした。とかく人を接待することを好んだ人柄が寺に人を寄せ付ける一つの契機になつたことは確かであった。

「高校入学祝い」を昭和二十八年から始めた。当時、高校入学には出石町以外の人には必要であった。その保証人に寺の住職がなつた。（住職は昭和二十五年から出石高校で教師をしていました）。入学式後、父兄同伴で寺に集合。若奥さん手作りの料理でパーテーがひらかれた。これが後に「勝林寺こども会」に展開し、仏教婦人会の活性化。仏教壮大年会設立へと運動していくた。

「仏教婦人会」は、大正時代から勝林寺に

は出来ていたが、当時は会長を坊守りが勤め役員は会長任命の固定的お座なり的で全体的に活気はなかった。早くから我が寺は地区輪番の役員選出を行つた。

昭和四十年代には、宗門でも御同朋教団をめざす「基幹運動」（門信徒会運動・同朋運動）が提唱され、当時のわが寺の住職も（高校勤務のころから）兵庫教区や本山へ出てこの運動に携わっていた。

出石組は全国に先駆けていわゆる「連研」

（門徒推進者養成連続研修）を昭和五十一年から開始し今日にいたつている。おそらく全

国トップであろう。この連研には住職・坊守全員が係わり共に学んでいた。その間坊守は

全員「得度」（出家式）を受けた。その「連研」は勿論、年一度の「念佛奉仕団」も、出

石組での「門法会」（十六夜会・玉日会）も

すくなくとも我が寺の坊守は欠かさずお参り

し世話をしていた。勝林寺でも独自、毎月二十六日を「みのりを聞く会」として住職法話をして坊守は必ずノートをとりながら熱心に聴聞していた。

ご門徒のお葬式にも坊守は出来る限りお参りしていた。

寺では十年に一度くらい大きな事業がある、

「本堂内陣莊嚴」「本堂外陣格天井改装」な

どなどの事業も頻繁に行つてきた。

前住職は、企画力・実行力がなかつた。そ

れにひきかえ前々住職に仕込まれた瞭子坊守はこの面でも

驚くほどの力を發揮した。しかし、瞭子坊守が前々住職と違つては決して独断専行でなく、自然に人気を集めることを成し遂げる点にあつた。総代会・仏事・仏婦など役員と円滑に相談しながら、いつのまにか自然に行き着いて

いる、そんなやり方であった。決して表立つた指揮をとるのではない。たとえば改装工事の時などは裏方（工事従業員の毎日の食事など接待を一手に引き受けるなど）に回り誠心誠意はたらくなどであった。「誠心誠意」こそが彼女のモットーであった。

また「ご法義」をきして専門的に学んだわけではない。しかし生まれ故郷石見の瑞泉寺は代々学匠の寺。幼いときから身についた法味は死に至るまでその人生に生きていたようと思う。

何かにつけ口づさるむ「ご和讃」があつた。

超世の悲願聞きしより われらは生死の凡

夫かは 有漏り穢身はかわらねど 心は淨土にあそ

ぶなり

（帖外和讃）

「本堂内陣莊嚴」「本堂外陣格天井改装」な

どなどの事業も頻繁に行つてきた。

病状が進むにつれて次第に言葉すくなつて、とにかくどうであれ、出石の寺の近くに

帰りたい願い一筋であった。

末期が近くなつた平成三年の初春、寺の近

くの出石分院に搬送された。アメリカから孫の女の子が弘道小学校に転校して帰つて来て

くれたのも大変なよろこびであった。

毎日付き添う住職。例の実母伝授のご和讃について質問したり、はじめて要求して『歎異鈔』の親鸞さまの臨終の章（第九条）を何度も何度も拝読させそのお味わいを延べてみたり。四月半ばまでは割合意識もはつきりしていた。隣寺の坊守さまから見事な薔薇の花束を頂いて、それを「何種類の花」と数えられたのは五月の初めまでであった。

なごりおしく思えども、娑婆の縁つきて、

力無くしておわるときに、かの土へは参るべきなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲

大願はたのもしく…

その通りの終焉であった。七月二十五日午

前十時であった。私には「みのりの母」であ

たし、終生そうありつづける人である。

夫の死はたのもしく…

その通りの終焉であった。七月二十五日午

前十時であった。私には「みのりの母」であ

</div